

ASEAN設立50周年記念

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」

2017年7月5日(水)～10月23日(月)

国立新美術館と森美術館の2館で同時開催する初の展覧会

国立新美術館と森美術館、国際交流基金アジアセンターは、2017年7月5日(水)から10月23日(月)まで、「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」を開催します。ASEAN(東南アジア諸国連合)設立50周年にあたる2017年、東南アジアの現代美術を紹介する、史上最大規模の意欲的な展覧会です。本展は、同じ六本木エリアにある国立新美術館、森美術館両館長が発案し、国際交流基金の賛同により実現したもので、3者が総力を挙げ、14名のキュレトリアル・チームによる2年半にわたる現地調査*を経てASEAN10カ国より85組(予定)のアーティストを選定、計約180点の作品を2館の会場に展示する、初の共同企画展となります。

人口約6億人。多民族、多言語、多宗教の東南アジア地域ではダイナミックで多様な文化が育まれてきました。経済発展が目覚ましい近年、その現代アートの動向にも世界中から大きな注目が集まっています。「天気雨」を意味するタイトル「サンシャワー」は、晴れていながら雨が降るという気象で熱帯気候の東南アジア地域では、頻繁に見られます。一方、この地域の歴史を振り返ると、第二次世界大戦後の脱植民地主義のもと、冷戦下の戦争、内戦などの困難を経て民主化や国際化を迎え、近年では経済発展や都市開発が急速に進み、大きな変化を遂げています。「サンシャワー」とはこのような紆余曲折の歴史を経てきた東南アジア地域を表わす詩的なメタファーでもあります。

本展は、時代の潮流と変動を背景とした東南アジアにおける1980年代以降の現代アートの発展を9つの視点から掘り下げ、そのダイナミズムと多様性を紹介します。

*現地調査のレポートはこちらからご覧いただけます。 seaproject.asia/

【展覧会の構成と会場：9つのセクション】

◆国立新美術館会場

■うつろう世界 ■情熱と革命 ■アーカイブ ■さまざまなアイデンティティー ■日々の生活

◆森美術館会場

■発展とその影 ■アートとは何か？なぜやるのか？ ■瞑想としてのメディア ■歴史との対話

【ASEAN(東南アジア諸国連合)】

インドネシア、カンボジア、シンガポール、タイ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス(50音順)



東南アジア10か国から成るASEAN(東南アジア諸国連合)は1967年のバンコク宣言によって設立されました。原加盟国は、タイ、インドネシア、シンガポール、フィリピン、マレーシアの5か国で、1984年にブルネイが加盟後、加盟国が順次増加し、現在は10か国で構成されています。2015年に共同体となったASEANは、過去10年間に高い経済成長をみせており、今後、世界の「開かれた成長センター」となる潜在力が世界各国から注目されています。

※出典：外務省ホームページ

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/>)

【ASEAN設立50周年記念「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」開催概要】

- 会期 : 2017年7月5日(水)～10月23日(月)
- 会場 : 国立新美術館 企画展示室2E、森美術館
- 主催 : 国立新美術館、森美術館、国際交流基金アジアセンター
- 企画 : 【国立新美術館】米田尚輝(研究員)、喜田小百合(アソシエイト・フェロー)、
武笠由以子(研究補佐員)、長屋光枝(主任研究員)
- 【森美術館】片岡真実(チーフ・キュレーター)、荒木夏実(キュレーター)、近藤健一(キュレーター)、
椿 玲子(アソシエイト・キュレーター)、徳山拓一(アソシエイト・キュレーター)、
熊倉晴子(アシスタント・キュレーター)
- 【東南アジア インディペンデント・キュレーター】
マーヴ・エスピーナ(アーティスト、フィリピン)、オン・ジョリーン(マレーシア)、
グレース・サンボー(インドネシア)、ヴェラ・メイ(シンガポール)
- 一般問い合わせ: ◎ハローダイヤル 03-5777-8600 ◎展覧会ホームページ sunshower2017.jp

□ 観覧料(税込)

	2館共通		単館	
	当日	前売	当日	団体
一般	1,800円	1,600円	1,000円	800円
大学生	800円	600円	500円	300円

※高校生及び18歳未満の方(学生証または年齢のわかるものが必要)は無料。

※障がい者手帳をご持参の方(付添の方1名を含む)は無料。

※学生は身分証等をご提示ください。

※団体券は各館で販売(国立新美術館は20名以上、森美術館は15名以上で団体料金を適用)します。

※前売券(2館共通のみ販売)は、展覧会ホームページでお求めください。

(販売期間については、後日、展覧会ホームページにてお知らせします。)

※サントリー美術館、森美術館、国立新美術館で開催中の展覧会チケット(半券可)を提示された方は、相互割引「あとろ割」(200円引)が適用されます。

※森美術館併設の展望台 東京シティビュー、屋上 スカイデッキ、森アーツセンターギャラリーへの入館は別料金になります。

【巡回】 2017年11月3日(金・祝)～12月25日(月)／福岡アジア美術館

【国立新美術館 企画展示室2E】

□ 住所

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

□ 開館時間

10:00～18:00(毎週金曜日・土曜日は20:00まで)

※入場は閉館の30分前まで

□ 休館日

毎週火曜日

□ 美術館ホームページ

<http://www.nact.jp/>

□ アクセス

東京外口千代田線 乃木坂駅

青山霊園方面改札6出口(美術館直結)

都営地下鉄大江戸線 六本木駅7出口 徒歩約4分

東京外口日比谷線 六本木駅4a出口 徒歩約5分

【森美術館】

□ 住所

〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1

六本木ヒルズ森タワー53階

□ 開館時間

10:00～22:00(毎週火曜日は17:00まで)

※入場は閉館の30分前まで

□ 休館日

会期中無休

□ 美術館ホームページ

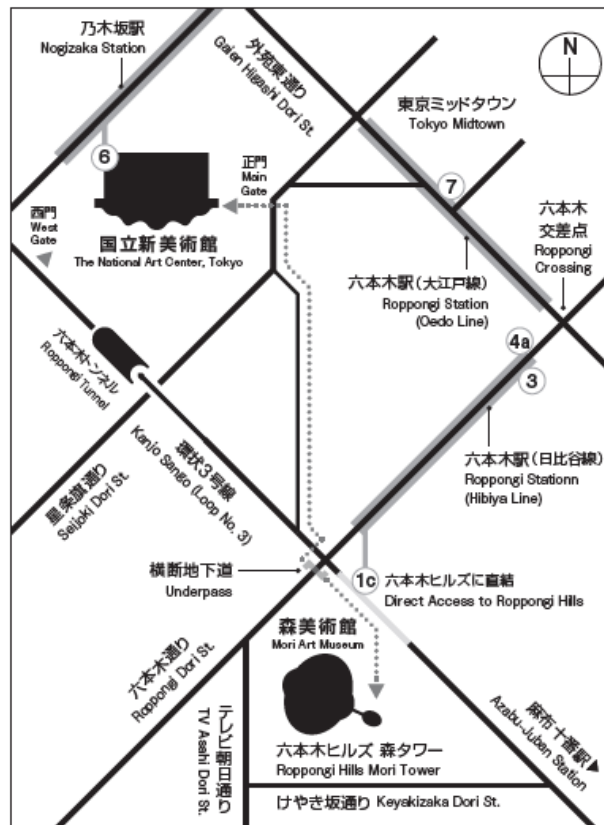
www.mori.art.museum

□ アクセス

東京外口千代田線 六本木駅 1C出口

徒歩0分(コンコースにて直結)

都営地下鉄大江戸線 六本木駅3出口 徒歩4分



— 本件に関するお問合せ —

『サンシャワー: 東南アジアの現代美術展』広報事務局(共同PR内): 三井・谷川

TEL:03-3575-9823 FAX:03-3574-0316 Email:sunshower2017pr@kyodo-pr.co.jp

〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル7階

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」 セクション構成と主な作品

【国立新美術館 企画展示室2E】

■うつろう世界

世界のいかなる地域や時代においても、地図には政治的、経済的に多様な価値観や視点が織り込まれています。アーティストが描き出す地図は、単に地理的な特徴を記すのではなく、東南アジアの複雑な歴史と空間を表しています。本セクションでは、異なる視点から土地とその意味を見つめる複層的な地図、人々の移動を記録することで記憶を呼び起こす地図、理想的な社会を求めた想像上の地図などをおとして、東南アジアという空間を考えます。



広報作品①

イー・イワン

《うつろう世界》（「偉人」シリーズより）

2010年

ミマキデジタル・インクジェット・プリント、酸性染料、
ろうけつ・藍染め、絹

140.5×298cm

Courtesy: Silverlens Galleries, Makati, The Philippines

■情熱と革命

東南アジア諸国の多くは、第二次世界大戦後の1940年代から80年代まで、植民地支配からの独立が続ききました。その間、独立戦争、インドシナ戦争、ベトナム戦争、カンボジア内戦などが起こり、一方では芸術表現への抑圧や弾圧が続いた国も見られました。そうした環境のなかで、多くのアーティストは民主化や表現の自由、言論の自由に向けた活動を行ってきました。本セクションでは、こうした時代をリアルタイムで体験したアーティストの作品を中心に紹介します。

広報作品②



ホー・ルイ・アン 《ソーラー：メルトダウン》

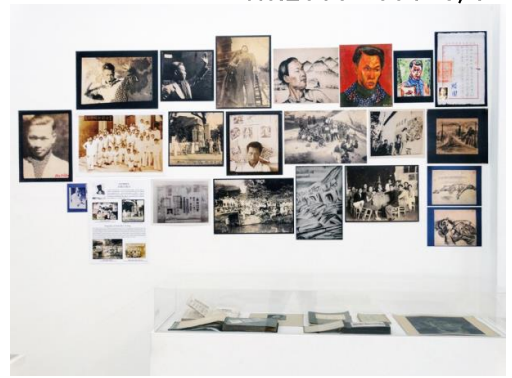
2014年～

ビデオ、デジタルプリント、ソーラー電池式玩具
60分

Courtesy: Maezawa Hideto; TPAM Performing Arts
Meeting in Yokohama, 2016

■アーカイブ

近年、インターネットの発達によって、それまで発見や入手が困難だった情報へのアクセスが容易になり、それを起点にした調査研究をもとに、美術資料をアーカイブ化しようとする動きが見られます。東南アジアでも、各地で蓄積されてきた資料が公開されつつあり、その一方で、美術資料そのものを素材として作品化するアーティストも増えてきました。本セクションでは、そのうちシンガポールのザ・アーティスト・ビレッジ(TAV)の活動を総覧できるコウ・グワンハウの「シンガポール・アート・アーカイブ・プロジェクト」(2007年)をはじめ、いくつかの例を紹介します。



広報作品③

コウ・グワンハウ

《シュ・ティエシエン—アーカイブから見る作家の100年》

2014年

南洋理工大学CCALレジデンス・スタジオ、シンガポールの印刷物、資料現物
サイズ可変

所蔵:シュ・ティエシエン&シンガポール・アート・アーカイブ・プロジェクト
撮影: Koh Nguang How

■さまざまなアイデンティティー

脱植民地主義の時代に入り、独立や民主化が人々にもたらしたのは、新しい国家としてのアイデンティティー、民族としてのアイデンティティー、個人としてのアイデンティティーなど、自らを成り立たせているアイデンティティーとは何か、という問いでした。この複雑な問いは、冷戦構造が終焉を迎えた1989年以降、それまでのイデオロギーに替わる新しい価値の基軸を求める世界各地で共有されたものでもありました。この時期に制作された現代美術の作品には、さまざまなレベルでアイデンティティーを問うものが多く見られましたが、これは今日もお複雑な課題として継承されています。



広報作品④

アラヤー・ラートチャムルンスック
《私たちが若かったころ》(「女性像」シリーズより)

1990年

エッチング、紙、38.9×93.4cm

所蔵:森美術館、東京

■日々の生活

1990年代以降、多くのアーティストが毎日の暮らしや日常に目を向け始めました。国際的にもグローバル化や多文化主義が拡がり、世界各地それぞれの平凡な日常のなかに文化的、社会的、歴史的な文脈を見出し作品化することが、新しい世代の表現として注目されたのです。そこでは、家族との思い出、毎日の食事や遊び、路上での多様な営みが、絵画、写真、映像、インスタレーションなどのメディアをとおして現代美術の文脈に持ち込まれました。同時期、世界各地で急速に拡張した国際展では、新しい世代のアーティストが注目され、東南アジアのアーティストも世界へ活躍の場をひろげていきました。

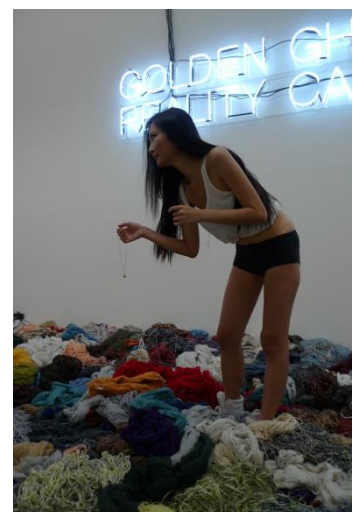
スラシー・クソンウオン

《黄金の亡霊(現実と呼ばれて、私は目覚めた)》

2014年

金のネックレス、工業用毛糸、ネオン管、鏡、写真、他
サイズ可変

パフォーマンス風景:台北ビエンナーレ 2014



広報作品⑤

【森美術館】

■発展とその影

総人口6億人を超えるASEANは、世界的にも今後の成長が期待されており、自由貿易によって生まれる巨大市場に海外資本も注目しています。成長率は国によって異なりますが、高度経済成長とそれに伴う開発は、都市部の景観を急速に変え、人々の生活にも劇的な変化を及ぼしています。その影で社会には格差が生まれ、伝統的な文化が喪失されることへの懸念もあります。アーティストは、しばしばそうした変化を批評的に見つめています。



ジョンペット・クスウィダナント
《言葉と動きの可能性》

2013年
原動機のないモーターバイク、旗
サイズ可変
所蔵：森美術館、東京

広報作品⑥

■アートとは何か？なぜやるのか？

公的な美術館など現代美術のための制度が発展途上にある東南アジアでは、創造活動の目的も現代美術を取り囲む制度内での成功に限定されていません。むしろ、若い世代のアーティストのなかには、環境問題や離散する地域社会などコミュニティのさまざまな課題へ向けてアートに何ができるのかを問う姿勢が顕著に見られます。コミュニティに介入し、一般の人たちの参加を求めるソーシャリー・エンゲイジド・アートの実践や、コレクティブ(集団)としての活動は、日本よりも色濃く見られる特徴のひとつと言えるでしょう。



ニュー・ゼロ/アイ・コー
《村の美術学校》

2015年～

広報作品⑦

